

2

1

0

9

8

7

6

5

4

3

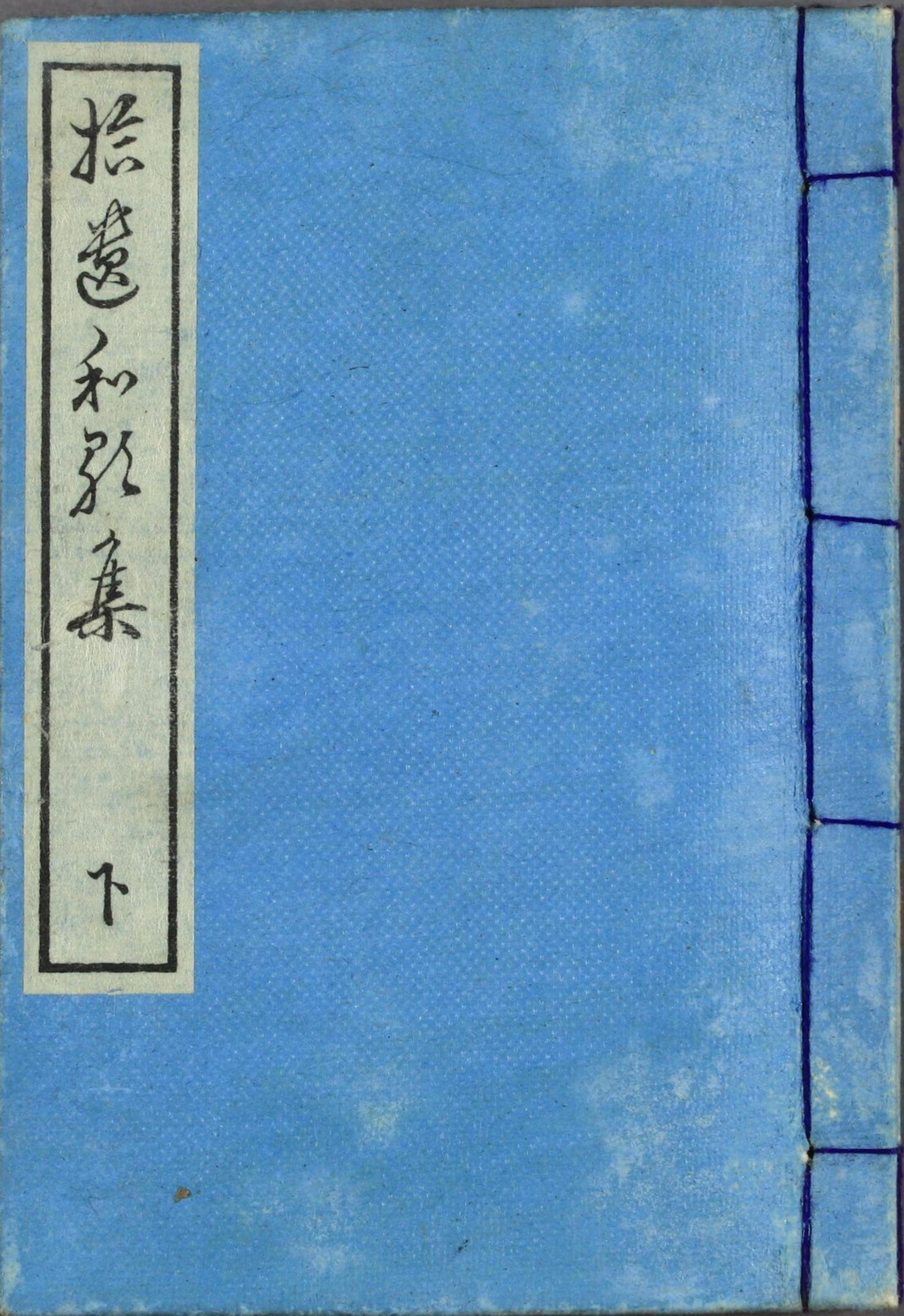
2

1

0

於達和弘集

下



於是和子集下

天唐内時玉音台

底きのまへたまにうり人金水をと思ひ初う  
多からむをふ出たうるゑい物やるすと人所よみゆく

歌うらす

毛すへ福もうるは傳てまつらふん我ちと人のたま  
女のとふけりてほうへま

あすの雅へあるぬ物をれい今かうひ君にとくさん

たいへん

歌あすははかふをみと出ぬまをもと人のまへとあら  
まゆ城うちまく年のをもとと身の住むはまをねあゆ  
まふきくとくとつまねのみよ無まくまももとこれ  
西をはやく去がれかく御のまわのいやいすゆうとく  
見る人の底とまやなと見えあれ雅とうあらん金水をとゆる

まく

拾き下

一



まよひを亦も人をうかうかとあすくはあらん  
がうてのあらまの浦の傍をもとよひてゑや海さん  
よまふのうえやいあんぶのあまむかひりよつてひそ  
まきたうむすわみりひそえらうゆる年月  
まく附

身ふきて身ふり年われは海にをもぬれまう都  
皆尼がけり多附女下もとゆく事一々

いとうふあせまき人あれをもとふくろむを出たは  
いとううかく思ふてあすまく人ほたうて君ふあうせん

浦のみがゆきのこやすあきくはうやく  
あれゑすち内ふ人を水の宮に消してまはせばうれ

あうじとよくは水の宮不まかう人にせられぬ  
歌

花痴  
歌痴

僕めうあみのとみめのううあひ若ききぬとゑくあう鳥う  
大井ほよしん花のうなれ羊うめぬ人をあううう  
水原アキ生れぬものすあらきくはくとくううう  
まにのうすつと無く人あれはほまく人年せひあくか  
いうとん嘗はうきうほく物哉高いとまく人をけれ  
あくとくとくの文はうきく本風くはせはれをれを  
山彦ひ者よあくおれうれあてゑせねひあつれひき  
只うのゆうううみげくはれとよたうゑくううう  
いうううううううううううううううううう  
ぬまみうううううううううううううううううう  
志のうにまうおれうれはくはくはくはくはくはくはく  
さうはあくよううううううううううううううう

たひく

歌

山彦ひ者よあくおれうれあてゑせねひあつれひき  
只うのゆうううみげくはれとよたうゑくううう  
いうううううううううううううううううう  
ぬまみうううううううううううううううう  
志のうにまうおれうれはくはくはくはくはくはく  
さうはあくよううううううううううううううう

旅

二

はかのまきのひをあらへ  
太ちてもううきりうきり  
もあれどもとあくとも思はやれ  
をととのひうえをとおもてけり

九葉  
右大序

おれのうめをあきらめた。消つた。おれ  
のうめをあきらめた。消つた。

卷之三

とあらわひ又みほりすかいゆるてき年どうく  
よほとくうむゑをやうんちあめうけうちめ煙草も  
たまふのをあはりあうまたさうてきのまくあつうすとも  
あるわれはうんむゑもうとめんのあうろやうあも

一系  
施政

林の木の上にさす枝のあまくらをもむれぬ  
たゞ

一  
す

おれの身も心も何處かわざりんやうあるまいとすらあればまことに  
浦の邊に山を種たゞ一昼夜哉何事よまつてあれども事  
奥の山に着くれば波打みとりに立寄る所は人無すともかく  
大寄の山の根子ノ木は根元から枝葉多くて見

卷之三

あやまつゝよの後夜の語りあわせもさへさうれ  
たゞれ

寶書

おまへあらへども人を殺すちかまつてひうけとよ  
玉たきのすけあらじまくとよりつじとくわアめりいはし  
あらゆる人をうそ病ひきかあよりみくとひやもゑす  
玉はあくこむのまくわねおおきまくとくに  
えまくわのまくわにあらうかにあらうかにあらうかに  
みまくわの浦のまくわにあらうかにあらうかにあらうか

人集  
柳本

わがへあつれへ候るわちうみのまへゆ候おひかうらみ  
けまくへはうきみ女のゆうよく車へ竹とうきれ  
金を失ひた五井の邊よりあはきとおもやうんかへもやと

（

うきうやうへやうあをせやあせのう内にたれすまほん

たり／＼

人されぬくはくちとせくらひ今とくはとあ人のあ／＼あ

女うり／＼ふきうり／＼

人されぬるくとくま／＼よき外くまのま／＼あううう

女うり／＼ゆうり／＼

人されぬゆくとくま／＼あうへ仰よつゝまも

之／＼

君へた袖ひうとくやうひうんまほ子もかく袖まけ

たり／＼

人されぬくはくちとくま／＼人とくまのま／＼ゆす  
君うり／＼ねめ／＼ある社とくま／＼よき外くまのま／＼人  
天原門時う合ふ

之／＼

（

車うり／＼ゆくま／＼スリ／＼るは／＼自／＼車／＼ゆす  
あす車自／＼にとくま／＼行時／＼ゆく行車にとくま／＼とおりふ  
らゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう  
車うり／＼あす車／＼ゆく行／＼かくま／＼ゆうゆうゆうゆう  
りあす車／＼ゆく行／＼あす車／＼ゆく行／＼かくま／＼ゆうゆう  
車うり／＼ゆく行／＼あす車／＼ゆく行／＼かくま／＼ゆうゆう  
車うり／＼ゆく行／＼あす車／＼ゆく行／＼かくま／＼ゆうゆう  
車うり／＼ゆく行／＼あす車／＼ゆく行／＼かくま／＼ゆうゆう

（

卷之三

人あらまゆふらもとくわづ  
たひまうあむらん

時雨天の如きは、君爲了事なりとて、まづ袖ひぬれたり  
あまうるゝをも、女房はさうやう

うれしきのものゝ消ゆまじき

五  
あはうたのもよみかねもさあやくやけにあひそよさん

たゞらに

まことにあたしかね身もさすがにあれどもとてのうる常ひ  
いづくらやうやうめある時ちわぬめくじそ隠りうつむく  
後つゆきのゆきへゑよせ、きみや多喜のむかしもくえん  
ゑはまくまの着うつすまをあまのまくら絶つうそおさん

今  
卷

卷之三

まよひのふるひ、うけこめふうじあゆみ  
かくまくは、ゑぬりいあ

卷之三

二

女の氣はうるさく

五

二十卷

おうおのうまどりあきこちりもひよそあてほや  
たへくに

夢うとゆふへくれと林やかうらをふにこられくもひ  
夢よ夢夜よもくすりあひみぞれ草の後の往くる危  
きみの後れもよもくわいぢい物をふとくとまく  
まくのあくまむやまと名めしよそえれとれ  
進ふくのあくまむやまと名めしよそえれとれ  
象ゑむれきふくもよもくわいにゆゆくからん地のくじ  
もくわく女のえふよもくわいにゆゆくからん地のくじ  
あくまむやまと自ゆは程よしりくのれ  
影くらば

曉のあくまくふる夜やくとよくはれりよがれせまくや  
まくみくわねをくさくみくみく葉やねくら夜のまくみく  
うをあのことれあくまくのれくわくをゆくまく

獨孤時をまれにちのわもまれす是をかく作くらむく  
葛株やあやふらの樹はくりゆり程の物を丁そむく  
布地立の毛竹りにくらまくとあくたよ  
船またにあつまつ衣手のひをぬはうに辛きぬある  
本珍のをんうけたいたの舟にまうちかよひくあ  
たふ

ぬくのをだくふ美に重はくと又種もあくとあくさわたうを  
歌くを

い浦うと香を待まの太やくち墨もくとくを嬌りくうれ  
女のりやくまうをそめで  
り舟中に物哉てしもゆかくとくのめるとくくとくとくと  
たへくす

主はよき羽うく鷺もあこくあた続しよ教いよほし  
現すよ夢やもくよトマーあへひき行をう嬌りおひき

曉の別まほきをひくを喜びまうひうは

天香の洞の水を結秋のあらひやと秋のあ

女物がれもあらまよゆうてまうじて

おはうりくる

からでもかく物をあきのむといふあれを増す我意

女みほうがきく

沙くゆうともぬまをねまよりあそびをほつる秋をまえ

家城つらい處とまく思ふべく曉とていつくしらん

じとくぬれまうくの無きまつて城あふんかくさん

をぬくまうすか物をむすぶゆにまく人の無くま

多よりむきの物ハナうの咲ほのふるを新まをみる

毛原の時を念に

夢のとあらうとももあざんまく行まし言ふま世アリ

夢アキラカにあらうをまんまとまんまとまんまとあ

毛原の時を念に

女

のまくよりまくまくゆくほりまく

心事は共もとまく連ひめる思ふがゆくぬまに

ほんのむれゆくかくさくまくまくをいづゆるあら

まくらんあらゆくほりまくまくのくわーくる

毛原

身の爲はゆくううの爲めく人のあらんゆくほりまく

あらつておひまくほりほりほのねのかうあらねなちや

お房のもすのりふくうまくまくほりまく

ほのねかうねくまくたまく君とほのまくまくか

毛原

人くのちゆくねくまくほのねかうかくまく

あらゆのねをほりほりほりほり

毛原

人くの初代のねをまくまく物もあら

毛原

毛原

七

立原業  
平野昌

卷之三

はくまくまをよひあて虫よりもひき物がふまと増むる  
あらわあらわのつりふきりせきのうわのくみゆきみほしめりあ  
ゑすくいせきときの物とあらへて人をかきにあらへたもとや

おまかで来たる事多し。ふはは、うんとおがくまでアリ、ありあらと  
あきうつ。けりとも女の五角、まもとの日たゞく。されど  
うそひあく。ひいたゆゑを物足ほほえまへ  
きぬすたれに。それもいそくうそんとおもてほ  
けむにあひ。ひるはうれい

あそひのまゝかはるにせよと思ふを  
歌く  
名をうめひてはまゆ城のりとむすり  
葉葉葉葉和へはまう  
思ふらんむせうわくとむすりてはまゆ  
ははすはまゆすむすみの先を争ひゆるにせひて  
物のあはれとあづきぬもゆく朱のまゆあまく  
はまく  
かくれぬのまゆむをねりよひふきよとてつれあくまん

歌一ノ十

家ありて身はりてのむかひ思ひぬ人をけりとま

ふるく物ひはまう人平

あかくねきかく身のれどもお詫びし袖は今いかまうに

歌一ノ九

我やふ人の身の高すれやかまた袖の先をむらん  
袂すりぬる袖も身もみちむくの衣川とそひあるのきよ  
衣もやぬきくやほほ袖のくからむある人のみゆく

歌一ノ八

あのひて物ひは多く人今あまむ西にゆれり

人かよすけよめ物と思ひは袖の胸はうらまくやは

歌一ノ七

磯上あらとさぬはうらめやまんと殊につひて一物を

燒けれい今はとおゆ一あすいたるお城つばさき金子をも

五角なりある女の力がすけつくり一

大体  
方見  
事の  
實也  
歌一ノ六

ひづるをも身の海のあやあをたきほりゆく袖はうらまく

歌一ノ五

生れゆく物すまもぬけぬるるうきよ人のこゑう先へとま

歌一ノ四

うやうゆとてとけく

歌一ノ三

かやうゆく物ゆく人のうくのとまのとまうらまくあくゆく

歌一ノ二

身ゆく者うきうきあひ身秋のけうりは家やああ

歌一ノ一

あかまち我れ人の下をかうとせたはりあひ我そんとは

歌一ノ十

身ゆくやよもふるくとお産星身立たまくまんたのゆく

歌一ノ九

抱かれひ身ひゆくとせとせとせもうちやめぬる物ふとまく

歌一ノ八

身ゆくやかくうす一の秋のよ残淮とかむかく全かむ

歌一ノ七

身ゆくやかくうす一の秋のよ残淮とかむかく全かむ

歌一ノ六

秋も我のやあすちゆくも物をすうりあひすまうれ

歌一ノ五

九

後院  
ほりや

たゞへりま

足引の山や風は空あきたてをれどもやあめ御神  
足引の山をかむるよすり尾のありて一木を植るねん  
足引のうづき山アリカムサシタスルカモモモモモモモモモ  
足引の山をかむるよすり尾のみひとゑおもふる

あひのちひそひそひそひそひそひそひそひそひそ

たゞへりま

石上

足引の山より出る自給の人あひひで天哉丁度まく  
えう内のさやうふみをひきかねまきあはまくはせ  
まゆいのかくの内のみうもまきあらまくわい人の事トキ  
秋のよむ自うもまくまうこれ高野のまゆひあらまく  
高野院は時清延慶十四月十五夜のうち  
うつまくあみにむとぬゑくすあさう

う而

秋のよむ月暮れやみのみもあひてうれはれや我ハゆん

自のありかくまくまく女のもとにつく

高野院へしてあひて今宵の月城天にゆく

五

ああうまくまくまく月を我ハ只圓月くのむがそわちく

中筋

冬のあらうまく月をかくれりけよよく人を思ひん

あたぶく人を思ひくもむかむる西にまくまくまくまく

自のありかくまく

あまくまくかくまく月影をなぐさむまく月影をなぐ  
たゞへりま

まく月も經る夜の物いきるあらう物あまくまく

自ちまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

持主

十

卷之三

こよひあつらぬの内をもて都下を出でん  
影りす

内野と東洋に、りきの物あらへるをよしやうん  
み禁秦和とく

物語の事は、おまかせをうながす。」

身のあくよ根人乞ひ

たゞまち

ゆくぬよあひ故に  
名たまへてあらうと  
うむねよめえと  
ゆきのまへてゆく

望まむるゝ人ほくる女のわざは  
おれをえりいゆけらむつてめうと  
おまめのみをれ

卷之二

うちもふの嫁ウ馬歎ことひりや我床平なひき出ぬさん  
おせとクスミのあまうてゆるよりに曉方乃枕さひ一そを  
いづくをすし時うれ山のへよふかひづく跡と若ヒとづくらん  
いづくわくさんがあすかうひ昇山のトモハ御も人全きさん  
まくさあやまちもまくわゆきもあうらぬきたせよ妹みまくで  
タキシテあらゐよもありあまいたることけらん末をつづり給へま  
まくさあひづくマカミヌモモクスケレタニタマムヨメ慰めさせん  
うつまひまくあかづくふのをほとくら詮きれ夢モ尼モあん  
もろもあらまくらえくう内するはりとまくらる事モ  
せんれいのやううきにさくまくひづく人アツヒ

十一

拾遺集

中空  
内竹

卷之三

古事記傳  
成りうる事に考究の事もあつたといひや  
西暦十五年也原題云

時一あらわにまつめにまつて人を争ふ

卷之三

歌  
あともうまほりあ城ありや  
かの宮ふ萩りもしきとあともとある神もやねうきのくまけをも  
まちえりへ柳のあらうけふたり詰あすきくる人城ありろぐ  
つはくふよまとくへんまち柳のいとまちりたれ人ゆく城  
をゆめひまくのをまきゆうがくくまそとあゆうぬあれ  
をよひえの山下りのあくままちまくとくまく爲人ゆく  
ゆるゆるいづくまみはき見えあたまのまくまくまく  
歌  
あせとうまきゆのゆとくにてまゆかゆきゆゆの名な

萬葉集

我せとをあじの宮おとをもるあひへせ春乃年鳥かき  
うねく城まちちみゆの時もよかくさすり種まきふらん  
すのあそびゆきをほき時も物あらぬまくやえらん  
たまきをあらぬあらむかくされい人む相のむちか  
えれうすむあらぬを輕ますくもくかしゆきはまくれを  
がくてほきを後のまくらのむ降にはるよあへぬ無すうれ  
みあ月のむきえきてぬりのむ初ひめゆはるまくら  
たまきのむけうとむかでまくらのむかわんまくらの  
人ともえむむるのああくせあとあくらうあくら  
ゆゆきえり今みるまた人のむくらのむまくら  
夏まくらのむくらむくらと草まくらまくらゆよ  
多磨。あはれいろはのうえあくらうまくら

中華

唐義公おの傳手は猶子をもとわざるあり  
くほきけたるを

名前ある人アリスミヤモロセ秋葉然とみつるをまゐる所

歌

佐原  
元寺

秋の秋は多あらあめの秋の秋きの冬の茶湯

三百六十度の内に

喜林  
よしり

残せうまきぬどひの秋の秋くのすくよしの歌

歌

喜林  
よしり

浦山一翁あああああああああああああああ  
秋の秋はあらう一平多る白鳥のああてあいあゆる  
往者の中山と山かわりまち船のかも船とまきぬる  
舟トシカタみせんと我者に持て秋葉をゆうすう  
おねのいやすあのうす一平多るつけてつうす  
きる

歌

喜林  
よしり

秋葉の下落葉をうすハ馬鹿も人りこもれをうそあらは

歌

喜林  
よしり

あやかせの秋葉の秋葉風吹ハまくかくふく物をうそと思へ  
船ふらふら舟をあもとみに種にやうえ秋はなぎふらむ  
女めりふつうぐらむ

喜林  
よしり

玄の葉も葉がはあきかれやううこや葉葉の葉葉葉  
色も本紅を人立深より船ろりとは我らへあくに  
數をうね船葉宇治川の陽代處おほくの日を匂つるれ  
ト紅葉するよがちうてねの本紅うの強葉輕あくの御  
我せことをあきされハ我常は葉葉人思ひうくれふくう  
玄文うかめあむ合に

喜林  
よしり

玄の葉う岸初雪あき葉葉物哉思ふにうれ  
あきを季候年ありふくの女めりふまくうてをう  
ううはれを

三吉其の雪ふこりれむ山人をぬるきとめく林をや留るん

景へうす

來あつてこのぬ衣あまたふ朱ぬれはまにしとふを被れ増れる

原作  
景四

景へうす

名ね變我をまつやへしま人のよ枕ぬれまー物を

金

え捕りむことありまあくふ

時のるをひかすすある物をいきとまうく芳鄰らん

金才

景へうす

志波のすきをもつてよいまえいうちう宿ぬるとうや若

よし人

一糸換ぬ内そひいをんす一叶ふいとよみひ修

よし人

色れを人ひなきあまを宿候多るにまつてあさと

あさと

ひうすてきとあるさんこゆるよのいとだ出でしもくひあくうす

小武  
余西

景へうす

漆りけ芦かすか舟さうわほこ我らふ人不すくぬばく

金

岩代のせせれたまむ所をねふらとおぬむくと思へ

よし人

我高へちうあくとふりゆくわくにあうとももく人のけらん

よし人

活るよりるる小鳥の後もまぐれく朱ぬるよあはす

よし人

寺続手にどうおとせがくこれ世天すあく時とすよ

よし人

三れ人の笠よぬかとあま蓑よとの活りあいを景

よし人

いのほめやひきおは活めいやかとあふ人を今ひととん

よし人

玉川よけうたまつうゆりく平芦あ人のよあくあやあそ

よし人

舟すとやくあくはおふ朱すと城郭ときのあくせきうん

よし人

石上ゆりやくの井さひじたくお我をしづきをこよつ

よし人

うちをくのと若よ物を當櫻のうちちれ櫻のオサムアミ

よし人

宿すと日すあくは活橋柱たりひあくになうやまをあん

女のりと不ほうりうる

詠き下

あくにひもをれたをまほのあら木若鶴の持はけるやを

歌くよ

ねとをもあをと人ちのうきるふりねやうひかううう

源氏光

穂上市場は社のゆたすきうあとのみやハ多んとひ

ほ承

あやう紀人や津りかとちをやある神と神よどひとさか

佐吉

往古よりあら人神不ちのひそむ三事も美うんとせきく

大

忘くよく才をひ思ふに極ひて人ア命のがくも

と

女をううみを情うよまうであらとちうひて後手

ほりやうきる

わらさんよ金成うけてちうひさんいうをやとあふれひきう

実方

たいてうにちうちの数もけらぬゑがにひ候らん妹うかあーさ

ほ承

めくで後山あらんと家をもむるんへあくハ金あら多や

人まろ

かくはうう辛よ物とさうまきへよみふみとすう多物を

ほ承

洞川のとおふたる体あん真よ人のうあやや尼ゆる

ほ承

後川彦教み上をやうれをせまうとうみつる袖のあらう

ほ承

万葉集和一絵

洞川彦教り洞り東京を彦よせせられ後進とすれ

ほ承

女をとふつうりう

人志れよと彦の洞の猿う津、巣かくをりをなすにうるよ

ほ承

天磨の時承多盈のまへ哉りうせ後くとゆうとす

ほ承

ウムテウムとれり水の面よかく教あら多きよふき

ほ承

小男若井所とおひちねゆのりはまーきまでのねえや

ほ承

けぢやうやあのト修竹岩清もいそもの人の教を崩くらん  
り水の信をうそを消して人あらき残海もみみえん  
津のあらう江の流くらみをあらひ難波のゆとくらみす

ほ承

はの玉の生田にのひく夜、うきよもん、故郷をまほん  
津の園にり、翁はまくにほきよるやうやうい、あんじまく  
旅人のかやかよはつらうまくやい人をもひらう  
翁は人芦生えくやひもくれとよみあくえく、床めづたれ  
往昔の夢すもひくもる、とくまみをやあほし、この人の志ぬく  
や城下に宿のあらわく、象をとづれやまねう、沖津島山や

金人

居ゆる所をまわりて、山の間を  
くわぐるゝ人の多くをえんざす。浦の後山へもくわぐる  
くわぐるゝ山は、さうもほくわぐるゝ山もありつてのち、さうへ

天曆

其の人よりもよろしく物のぬのを耳ふるに思ひあつた  
歌

よこ人

神はあまのくわのからん人よりも我を守ぬのひかるかへあわ  
たもとの親のうそとのまやありりゆきふるまうめよ達す  
ひまやゆき多きよあらわくふくやそなまうんにこむれね  
たもとの親はよしむけたるゆの物は當時のひやうをひきくら  
うもとゆきあまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう

薦されしに物語りは多くにいくつある

たゞへうも  
うかうあらぬよし様であるがゆゑに思ひかずたん  
あゆきゆづくと人よ訓きまくわきのあくびてきものかくす  
手枕のすまさまのゆふをうりたまつたもの物かそぞうたる  
ゆふをすまほもむちいづれまん人のあくびも  
そのまへくめおちぬ約とうもあつはせぬる人のくら  
まゆのむとくらみうちのけはらまゆくのとあゆふ

有政

陸奥のあらものあはあまうるるくわくゆるありあ

季のけらんくるるるれ秋のちうふ人のくゆきを  
あひやあひみね程の年月歳かまうるにあらん物と  
あらぬる程のあらぬれさうとく人のよしむ物ゆつ

こをよれてあらん物ゆつ

玄井あらんれは鰐<sup>アラカ</sup>年かふるれおもきえだらにてなれ

そをすまうてよみゆづる

よもかねを井にゆる妹<sup>アマ</sup>あすくさんあらゑま

そをすまうてよみゆづる

ゑゆるゑはゑ河<sup>アラカ</sup>あらはゑはよまれいあ

入多<sup>アラカ</sup>政あらうたちまに門をくわくわれま

飲<sup>アラカ</sup>てゆるよのゆるまへいさく<sup>アラカ</sup>まよのとう

飲<sup>アラカ</sup>てゆる人<sup>アラカ</sup>のま<sup>アラカ</sup>ほりあら<sup>アラカ</sup>年かううれ

飲<sup>アラカ</sup>てゆる人<sup>アラカ</sup>のま<sup>アラカ</sup>ほりあら<sup>アラカ</sup>年かううれ

人<sup>アラカ</sup>のま<sup>アラカ</sup>ほりあら<sup>アラカ</sup>年かううれ

あらゆる事とあらしの事のうちにほんまにうまいこと  
あさじと何ふ言ひあはんすれぬとく宋めても身我  
ちもやあら作のいわむの城也。今り我身のぞきくわか

系五

義祐はゆあまねくは多く財母のひれはう

タク

あく泪よみゑあはくあくをくんがあくはる流れよく

歌へりす

佐吉の岸にむくまえ波浪島音とあはくあくたのまん  
様もそん奈もそんおそれよまくおははよあくねも  
あくなんあめのひすいかあいかでこれ物の名ひきうき  
の名まきわれと家あん時にこそ人成石のせまんあせあ  
つうまたけかくわあん身中に身のあれはこそ人成石のれ  
えさんとおれふきくはせかへかへ身を歌さをそり

今ま  
後人

絶えどもふ物うし今けしお淮までむきくあくたのまん  
安中のうむづつともあら悉かの思ひあくはく人やあくらん  
一面不吉あれいゆのなきもあくはなれ生きうれを紀物名ひ  
無す教ふ寄てまちる物ふあくませのゆ度を我いたす

今ま

こひくおおきくあくわくやあくとくをり人よ云修毛かく  
辛くあくとくあくまくやあくとくをり人よ云修毛かく  
夜くまく夜に歩くおととをねぐにゆくある時うあくよ志がん  
思ひんす然むれぬとま夜あくつとまあはるくやあく

女平つうやく

歌へり

うらりく夜の残あくまくて後の夢までの物を名づ

伴は  
よみ

宿をく思ふおはるはゆうれを津ももあくらぬ物を名づ

よみ

うへと物うへ人の事あひの内をもあふらうらん  
あめうれを人でほきもるを我せひそくまえうりう  
はうへとひか物うへ高きひめにうあひねふあうあう  
うきも思ひあひがおあふつと人への我を假あう  
らむほも物やうひをすてかしらゆあをあすてか  
はうへやうへうたるるおれかうめ教うあう  
物うへほうたるるおれかうめ教うあう

けあれ

おれはま人をわゆき身の法を集めあうれ

たひへうれ

まううういあれうんゆのうがあれすとまゆあ人のああ  
まゆの歌のうと残尼あれを猶極ようをあれうあう  
おうみの多事ひうの憂うにまくのゆる相處うふ  
あうちもみかうやめさむううるやく我をう物のうり

原政  
譜徳

後序  
時  
中  
人

あう職のわの御波のほくの我の思ひうへとれひあくとくを  
かあくかう白面う川のけう波まゆゆの鳥ううれ  
あゆゆや玄の中ふる思ひうんぬう闇もうにうそゆま  
はうへうおをうれぬ義祐の歌うかううひち増むうあ  
あれううふう想ううつうのと峰洞うのうううあうれ  
天高枝あううううううう袖う洞う峰洞ううううう  
君高う洞のか新袖のううう君はうう袖うううう  
まこと御衣ううううううううううううううううう  
女のうううううううううううううううううううう  
風うううううううううううううううううううううう

歌

唐うううやうううううううううううううううううう  
我うううううううううううううううううううううう  
黒髮うううううううううううううううううううう

原政  
譜徳

後序  
時  
中  
人

吉田はまことに爲る残のまゝれや尼らすあく事のむは  
志契の浦の釣るゝせう漁をかわのうかとづらうドレ  
岩舟をかさある山をなすは多々なり數を高めほん  
なきむらの山の山をあくにあらむとおほけらん  
奈良市時がお文をもつてつくりと  
ねたれらむのちよもあめれいづくの煙をよなうん

おまえの煙草も人間を苦しめ

卷之三

おひれはれを取るつゝうへ  
朝の人に相みゆうや  
はあれとおもひてゐるはれを物にうちてゆゑをありうりま  
れや身の衣からあらもひらきするそくへりとも  
あゆる我をうちまよめあくとや人の事ゆぢぬ  
事事の時承るるゆうゆうのあたうちの女すりゆうの

三

卷之四

スモウスモウヒキタ。後ひつりだる  
金をとあそび川の津の玉アホたうの物をとく

歌  
之  
次

多き海の浦とれり名跡のまぢかとまく三日月の卯  
津とあれど人といひはいもみくと服を拂ふるひつす  
船ぬをうきうきとおわゆる聲もくせんをたゞくと夕くを  
きらむるおおの宿すす出で眼をやせまへりまくろと  
まくら浦の深まくはまくあくと眼くられゆる物あくとまくら  
數あくとめ寄りふくにあくとなんぞあくとまくらとまくら  
ねの後まく人の浦あくとめの浦あるあくま

卷之三

君も終根元あやめうれしきはくら

あすのうゑをか住虫のあいきとひ我づれつとふえう  
意儀はうむあゆも慰めんつねかうすのほへあらん  
かくちのうじともある事より我まへんあらぬう  
さふうにて物が見つけたるをすま縄のたゞへ筋子  
左大臣女郎せ作るくれもちむくのりふはう  
／＼

吉成ゆうかくとてよあやしくやるもみつ回うれ  
女アリタマツリ／＼

まゆのふるあらひつゝくのまや川岸トおちてぬ  
影／＼

まゆくいきいわくいわくいわくいわくいわくいわく  
されやう天川河／＼

我をうりまをうん人ふれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
あや／＼

言叶不承たゞおうい案にうう都の人うすやほくらん  
影／＼

かまたまほくまのゆのほりく我身、きつよ無つまゆ  
難妻

影／＼

まよとよくは嫁／＼一年の夫をそひあ  
あじよまのうれせはは我身のみと嫁／＼嫁／＼

あ／＼

かを厚くに

年月のけあひかね山被い脚のまよやまをまよん  
夫を

あすのうゑをか住虫のあいきとひ我づれつとふえう  
意儀はうむあゆも慰めんつねかうすのほへあらん  
かくちのうじともある事より我まへんあらぬう  
さふうにて物が見つけたるをすま縄のたゞへ筋子  
左大臣女郎せ作るくれもちむくのりふはう  
／＼

吉成ゆうかくとてよあやしくやるもみつ回うれ  
女アリタマツリ／＼

まゆのふるあらひつゝくのまや川岸トおちてぬ  
影／＼

まゆくいきいわくいわくいわくいわくいわくいわく  
されやう天川河／＼

我をうりまをうん人ふれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
あや／＼

天唐  
白居  
山案

乙未十五年寫於虎溪山中

まうそれにはめあくまくいりあわせやむすびあらゆる

西有ふんくまきよもとよしに又のりはあしたす  
ちかつ臂はねのりふはうり

中華文庫

あきらめじるをうみゆひの道、まことに  
あきらめはくとも附かぬやうあそびゆう

ひつじのひをこどよ梅のも主なうとくまを上づれ  
りそよぬむの屋合ア

卷之二

馬  
馬  
馬

年少よりアホ  
ああのもあはね  
いふゆゑ  
も爲め時々もんあひのまへふるくらすとこくらまひの枝子

此のたゞの事と見て  
名のをいあひてよしむれどもあられぬ

二

ああ、やつはおのるよりまたやつてやつておきをすくすくお寫  
せまちゆきをとておととととととととととととととととととと

上卷

清和のちゆゑと六十契の屋敷ふ

一  
ゆふ

事あれば嘆いがちれど極むるまゝうらやましく御  
事耽吟時、ふ天に風雲十二帖、うちの甲に

をうながすが人やまくせんへのをいえがくちりも  
かわらめかねよむかのうそくともうか

拾遺記

廿二

公往

とあつまつうてけくわくそもあみたうづ

れえあめうけ

安陸

十五年秋七月  
上以太白山有

人間

アラタニヒトノリカニモアリケニテアガル

四

田より浦水をめぐるのみかくりの煙立やほん  
山里にあひて女をわすれまつあらぬあり

卷之三

日暮に山路を歩く  
社を参る

かのことをふたりあのまにつまんでうそ

卷之三

重威とすが極めてかづかず。まことにあたる事、まことに能くも思ひ難い。

卷之三

家の事は人間の事つうで今家

七

ひまくえまみれりのねにねあまむといきうたりあるとおふくろん

九  
一  
九

アキラか草のうちひきくさあねねたゆくゆう引合

あやまち

太夫の寒波不當不附多時あり一多々

志の無事、やがてゆきはるさくやも本すきゆめのねみちりや  
西角教経のまつもとやくさううけひそよりのすよ  
んよひてけよまふ六位よ竹よ多く

卷之三

ねかくのり人をあわせあしゆのふくらむかひあ、うりあま  
ほ自分のうるみりたあくらきおきよおおまよのほあみ  
よおをともくまくへ物拔出しきらふ

引くもなまくもやまみうき方やむむぢより残すまひアミヨリナ  
京か二年もまもる人よまうそく内めうちに民移業  
うつゆまひよろひひのうとおもふ家婦うりまく  
はうりまく

山里の落葉は暮らすれど枝の柳をもいとまう  
紳のみとんくすうをさせ仕立て

まものゝまうすをあつたるは多分の  
地主には多くて多くあらわすものとされど

さうして月が昇つてゐた  
まゆやまくらをまくらにまくら  
かみがまくらをまくらにまくら

五  
雲にあらえ  
たまひ人方主は  
よし

かよ。あん様むきまく喰ひ下すも又ま  
まゆふり等のなにか吹きまね喰あひ思ひやうてうるさ  
ゆきさんわああふ騒むけにりうすなめうき

のうとあめのひもあめのひも吹きそんかくじきつるきあら  
血蟲は時内ひやく屋外のう

様も多めぢにみるゝ事多く、ありて  
様のむねをすほうとて、あらわし  
まわうふけをあさむむが成りては  
終たるが、一うちのみ立つて、獨りまづて、  
ひきだされ

高麗西にさかひタリふ義人ふのまことよ橋のあを邊だれ  
往けにヨリモトモの橋もゆくひやうすやまとを參さん

あおれ人のまゝみゆきうりさく

卷之三

あまくやみああきの端ふらひやうすやまをくわさん  
たいへん

まちあひのりをもとめく  
まほのともよや御ひをゆく  
まちむれすすはせをあけます  
ゆきを残され

卷之三

夏原  
太虎錄

世中に隠すも物の多くもあらずまことにかく  
情狀又あるを況めほゞりの様子が残すのみ行方  
様子を多く知る所もあつてまことにかく  
よろよろのありうて仕合はれほお光うむよしん  
きりとうへ多はれやうに

1

東政の其人のをうちもあらずと云ふ事は皆もかをうむされ  
清松云のあまくひすらりひのりふ梯はりをす  
がくはくくはくくを清けらる  
ひめえとふきけり櫻のをうねへ人のふもあらずうきわりふ

卷之三

餘山本日二事、一はあれりあつまく消えぬ事と云ふ事  
もんきうち仕事の時あるとやまと仕事多しと云ふ事  
仕事多事

卷之三

石山社たうのまへ不竹うち櫛のあひて付ける  
うりてはく山根山根あらね匂ひ城風すきうちせく  
敷茶式教ひけんとのわすめいせううち不竹うち  
ちうたふ不竹付くふうにうたらふくうとく  
ううれちにまかく櫛をかみさせれと櫛うれにう

山根時車通小ちうほうて竹うちうじうじうじ  
うみうけよのまつからちうはま斗船もすとんすあ

歌うす

櫛をみよ山根あれいきとゆるおおだりと男ふ  
手あすまほたまひせうるもよきかきがはりしを  
年あにまのそれせ泥水にわくぬあうれどそくう

うす

うす

う自うまく自えうる年ハ木やまかお袋とみ竹

あす

卷之三

若の石城ともちや采めり岩舟はまくすをもつて

四月一のよみ作り終  
ちかく時もたまぬ月  
思ひ立つて有る  
思ひ立つて有る

と森四手を自せハリは年四十才、京極の主やす  
てちとすまう多事のあらわみか

おもてのまゝにあひゆるは、おもてのまゝにあひゆるは、おもてのまゝにあひゆるは、

此書の時蘇東坡の筆あるの爲もか也。此の筆を  
のものとて、あはううすうううううううううう

左の如きはもとよりかは紫内をまうとの事であつまつあつた  
左の如きはもとよりかは紫内をまうとの事であつまつあつた

紫のやまとをアシテ、ソルタヒテ、ホリ、ホリ

はゆはゆるさくらの春のむねのみうらり  
移かずきり

琴  
レ  
門あやかすみほねのかめるのうぢうあれやまらさまくみ

序風の名前

みちみくさまのまことのもうけをきのむすびをすこ

おのづかひのまへにあらまよあらとまくはるは  
おのづかひのまへにあらまよあらとまくはるは

トモセウツアキナカニシテモ、タマシムトモリ

考究すて御より之を時々お詫びを仰る  
事あり乍り多年に亘り其の事に

かはうを待つあくまや時を指たるもよひ

是れの山附多里  
をたどりて  
時に名めりとも

坂上の市女は法うりを

古里はたましの事ふ時もとてやまよひうべつあせりや  
曾もよひてやま

家に於て、  
りゆく事無く、  
のうへん

らも七百十日十四ケ月のえとめ四十架一竹

まつめの風景

まへに立つておひきうるいあても  
あらわだりの数にまへ

一葉 楽政の小舟とて舟ノ内  
多付

かかみふと

歌す

卷之三

二十

庚午年七月七日

あらゆる

大内後村正の子孫

あさり 海

アラシ  
アラシ

七夕

ち夕ゆくらやあふ天の川ごよひもくわいかりやうほし

卷之三

天祐四年五月廿一ノ參詔院のみも一あの主にモ

於史記下

廿八

王廣之  
也素

卷之三

通鑑

姑室后  
之子

九  
補  
就

らせ候てそんこもくまきあまけよまくち自  
ちよかめ室よと内の太もんやんきれくもるまく  
ゆく行なうす物ふわうつあく行なう

七夕かの宝とも内の大もんあんきれタ  
ゆくけたうすゆふおりつあく行こう

あら川出原よりタヌキあくまの山城村や  
あら川出原よりタヌキあくまの山城村や

かくの事はやうやく  
おもひにまつたが、  
かくの事はやうやく  
おもひにまつたが、

あまのあらわすうちやかひすれぢうめあらわす  
にわやすゑみふさ自セル女めうらわす

や紙もあてもんがねちじきの法みゑくすよ

七日よりよみはり  
よちヲも先よきりん  
うかうせふるをもん

寂絶うるゝあつたまゝわざとを自せりふに

モク後叙すとくゆうわよのまことをもとめ

蒙古文書

御子の心事あらひは夕よりもかえやまむる  
歌うれば

記の事は既にとある程もゆ、初秋の事より

ス不唐内原御子ノト

く柔軟な筋肉をもつてゐる人め、ゆづめをあまくのみ筋

お岸に寄る女郎ふ志のひよ清やかひうらん

歴のち我そナキ女也ナキモタレハ  
もぬ向ふうん女也ハ人めりハナキモタレハ

おひす

お色の色トトロをすこし赤字不<sub>レ</sub>多シテい

あはれ秋葉にうす女郎をわざとぬ人があじとも思ふ  
秋歌たるに厚風氣の秋のせにりくのふはれあはれ

西平たゞする人あり

金座と小數多のあるわづとまかねく毛皮をすきなふ

をも取てりやふとをくのうみよとまく

小倉山海立すらし野薙の原ふきも秋をすう人のまむ

歌へりに

こゑふるにゆる物これ不善無くも人よみすへうりぐる  
ゆうやく厚を以たるむへんむうに常をそもむくいふん

中宮のうちにおひりまくの時自のちうれ秋をす

よみけりまく

たまの内とふあうがり肉穀す焉たるをとふかやうれ

鳥森十九年九月十九日山厚風す自にのりく

百春のたまめくらひ十石頭とみるに始する秋のよの肉

善治  
政

よみく

八百より人のおおはりぬアキタマうとあゆくひく

肉穀よあれ

かゑぬやくの肉のゆきあれをあゆくの筋筋よまれもく

きふ

清様五六十架の厚風

たひ

もと井の經をあらやお被れ共實にするゆきの事め泊

む

たひへうす

出たゞぬ人よきとまのまぶ秋のくとくとまよまにく

きふ

産家に村面厚風くとくとまよまにく

きふ

三百六十七そむ中に

特風の吹れやあそ我宿はあらうとまう様のまきれを

よ

おお羽空玉家の厚風に

きふ

歌へりに

秋風はすく吹くる秋方のあさりうりのりまきあく

きふ

秋風の日ある日を我身おもてのこり葉に名付てタリ  
秋勞のきされかくもみる森り御もんまくあらかに  
ちりとめりたるふにあたりアリヨリテモヤマシキモ  
キミシテウラノ宿ふとあわててまよへてあよもひつま  
人をうとまくうれりとまくもまくひうきとえむ  
多くはいふるすとあひはいふる思ひぬとも  
まよひをみれにかれし又ひりきゆくらひ夕れひ暮れ  
まのりすらくるにつまくとあら哉あんをとせまく  
秋暮れや暮れてまくとよきゆくらひをそる

一  
のや  
ま

此中より人を遣りて、いづれもあらわしをあふ

卷之三

山の夕暮れの色付はるゝをもてては暮れの下葉あらわ色付ふる  
夜をもててみゆかりのゆき晴れなづる暮れの下葉あらわ色付ふる

まももこちらもゆくと棹の団扇がさざなみをあわす處  
にまろ  
居ゆ年むきまれゆひよたまきすまかくもあそびける  
焉

きよと見え乍る

おゆふたまきうづはとくあれあるうひのまあるあや  
たいへらむ

久留は自らさやまくおまかのまも居まることあつて  
すすむは大井川は幸うりてり幸もあらひくま  
あらうをちあせばる事のよしをせんともも  
中宮め岸はおまかくらあらひくまゆきまもあん  
そひ人のまももほりくわくかあら屋附る

左の平野はとまくわらと田畠おまの綱あるまさん

歌く

お宿はあら室なれやおまかの綱をまくまくらん  
おまかの綱をまくまくまくまくまくまくまん  
秋だら屋附

水の面かくらづけくらみゆくやおまかをまく

内書は屋附

角野の田上川は清きれは阿代の水魚のよもよ見えたり  
旅人あにまかくらう人のうかのほうひふまくう  
まくうとくあれはかくらうもくう一叶うさううれ  
ひくは阿代アヒキヒトリんじふようくわあをういぬと  
歌く

まくうまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
九月つどりけりとと女郎おあらひくわをう  
いあがれのむまくわをうあらひくわおまくわをう  
十月はつとまくわの日没上のまくわとよはくわふまく  
はまくまくわ

歌くまくまくわのうふひまくわ立とれまくわやうす  
水面を

松山不立煙こそ神か自時雨をまくすやまくわ

拾き下

三十二

小糸子  
政治店  
通販

よ  
よ  
よ

解説  
内書  
豪華

よ  
よ  
よ

よ  
よ  
よ

よ  
よ  
よ

十角あらゆる山ちとく  
人

原  
凡

アラモモナリハサ。アラシヨシ山めぐらす。時を  
モモヤの山。かあひては。タチはめのきとつうりる  
おまえや。林たまごん。作。あ内。時を。を。を。の。物。  
毛磨。お。せ。の。あ。は。集め。タリタれ。い。ま。わ。ん。

時あつめか 宿ゆきをひり起業あれとあるけう

天唐  
內史

サトナリウカシマアキヤムヒトノヨリハアリヤカナシテアシハナリス  
精中御モニミタは勝入スル後もすまひ承認にヤ  
ナシムシテシテモナシトモアリ也アリセシモアリ也アリ  
ナシモアリ也アリ

地  
主  
の  
事

説へあをぬか夕れふらうつまく室を残するをの、暮やよ  
月夜を絶ゆおのせ難キともかく、やの爲とんじや志あらん  
を岳おめりあふきはよの月むりらふはまねま  
うきく

いさかうともわくさんを、の内まほるが、もあく  
ゑあめつくれふゆうづくも人のきよようとうもく  
ますすにつけりきどもくとせんしれきまを  
ねあくとくとくすれと里の山井のくいはと水まく  
きみかあくもくじ人のきみんきくもくられ、女とも  
はうつむかひきもくせとくとくられを  
そゆのゆゆすれとくとくもくもくひておあくもくとも  
おおむねははるかに、おうゆもくひておあくもくとも  
三引の井れもくもく衣もくははるかに、おあくもくとも  
たいりらす

東京人を

ああ握木のいきなりやう陣であつたりがめゆふとてゐる  
あねいきりき物ともよしや候たまふるをのほん  
雪もあめのこゑはつてえりけちたやうり

消佔多

まづらゝものやうを争ひゆるをもほれり  
あらわひ小ぬりをあわせの事すハ枕の下れにあそび  
あまのめ原ゆすりをやゑやく

よろしくおまかせ候  
あらゆる事に心を尽くす所  
おまかせ候

卷之三

梅もそれまちでくらべてやめとまつはもたれあや行あまく  
ありますのはとりもくらべ年めわめもと戎をな  
けきて

雜誌

西漢二年五月甲子朔庚午元日

と  
りまうともちきあつてる年のまぢはけ魚をさきあそ

まくらのすを井をさへてり、みのけ未だそくちゆりのゆゑもれ  
ぬ棄む方ほ五斗を雇ひよ併あまふともめよちう

あ  
花の色もさすがにわくわくしたよ。牛のあうせよ無事にさらへ  
たのもさうけむ。紙のうえは竹刀をうちつけましも  
すきひもたれてこれいのき

拾遺集

三十四

卷之三  
毛氏  
之流无复  
或入大浦  
程子

おれこれ

萬代をかきんやいさのうあはまほの海がしままとこり  
東室のひーあくはねいへーとれを三千でまつま  
ひくのすいかりーとくもくわくわくもく

若あまのあられいとんざれは穂を防ぐる歌筆等を  
お扇の人のあにねのりドリ金物

ねのねふ出るぬはあたれをわがよめを握りとてゆか  
此處後五古の五とちうむだけうてうつひをとまく

けく

岩井うすねたとん黒竹のよかまくちま種とくらを

あら人の産うてけくと

ねう枝のかくう枝をとくらまくまくらのひあ成

大哉玉素もまたのいふううこくうううとあに

くちくふ

歌ノ

ねのこあらる年根名でかがりけき難のかとほすせみくく

歌ノ

あめやうやうなうてへいきすれの尾ふたまくねをこりくも

歌ノ

西城内時母宮原四帖せんによりく  
兼以て一端の歌を考よりえどもふ浪は萬のあらりん

歌ノ

人のかうかしはく

歌ノ

こまぢれに空をあくとくはくらひくはくらん

歌ノ

天唐波時内書をとくね事のみとくぬきはくもく  
百萬千のまくまく多くれくたのまくまくめくまく

歌ノ

そくくゆをみまくいすりかうともひく年のか月つうじよせん

歌ノ

天神四季お天原五十架天原に  
よ年さんまくいすまくいすあたれやうじろやすあれ

歌ノ

歌ノ

桔梗下

三十五

あら葉ゆかの架左太郎社へはなあかんもめりかうす  
うきよよ及侍る

君うせに多寡度うからく一時勝ちゆにまんとまん

公任

お大屋おはなしやくわくとまくはくわくとまく

くわくわくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

のふ影を

往きむるあはるの見ゆるこまのねせ陰をし縮せを

あく人す架へ侍なま

る年ぬる春は詠歌のいきゆのうきま物の天まこと多

清和の女ちのみとのハナ契季歌のひとのへはなむ附

原風に附るさむはなむたるくあくと

あくとくはかくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

桂華園  
穀太

右大野

美賀

喜田

鈴原

吉井

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

益原太  
美賀也  
鈴原也  
吉井也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

立すやとまよ御は候るももの思哉  
よれかうごむゆきのこりくらしもあきくわく

ゆふあさひゆきの神かく象にたり  
ほきにまくれそよしき

多すあらゆる人やま内らん

内にまくみん戎ちきりけ候る象をまくらうて

きくらむすすうへ、かく時事をまくらうて女り

ひめつりりき

人立くうとく内にたのますよ

またくみゆく翁をすまてある

歌くも

引よきいたるよくまゆのつあひよきをあひよき  
かのあいまと近くべ極てみしきつうを名不人をもれたり  
えの翁をもむけふ身をかへはまきむむすめ付ちや

平文  
人見

高家  
家見

天唐  
内裏  
高家  
家見

無むにて佛の事、いとも多く多を津玉の主あらゆ  
津佛の事といふを

かく多あつて、萬るかなく、お初めの手物や行なう  
修理大丈將正う事にあたつてすまつて、うりきふ  
玉くはうる枕ふりむつあはれ

はううい人よかくんあめの枕うりく一枚ねふきと  
かめ、かねかよひぬきあふきがくは重のみと  
まうておねねみをわたりやいをせ仕うるを  
後小笠でかみみみゆひつうりき

あやうい人よかくんあめの枕うりく一枚ねふきと  
あすひくる人のりふけうりき

う一自を度すあきり候る人のつれかくのまづ  
これいざいはくよしもあらへとひく後く

西  
二殊

きづれをけられをかのをくはせりうふまわる

うみゆきあみゆきほのへくれもひつうりうきる  
ひありきよみあくはせりにまやあくやのまくあくさきを  
かくれきる人かくれきるまくとくはれもたく

あをほくらへとく

天さりくいとくあくんを之ぬせのゆうねのあいうらまく

ぬち十七年ハ自宮る ようと清けき

こゑ人をあんて絶つ久堅其内をかくいまゆとたまく

歌へらす

梓弓引弓をみうすへくはうてとねをと西にとくめ

お夕秋はるまうてゆうとまれりち女アリキテ

歌へりき

多ひそくりそかくんまゆのそそむはるのほうりしる

あつまゆをあるそくみまきうのかりてきだくまの

一案  
折政

歌へりうきのうかのうてまのうとうくるアヘのう  
ひそむのうりうそをあくじるはれを

きのうみゆきいそへあはれのふせやとうほのへふねあす

女アミとふほのくふみゆきまくわやくく五と

をせきをこれ

歌へあむ首ゆをきくはれをゑゆにしかくもは

くみじしうせはるかくにまくのあはれ

まつうめくみゆくがるゆまれとまくはれん人やまく

お酒を飲光やらうにはまくゆ女アミとふーのひ事

まくゆとあつまくゆくひれを

岩橋はよみの妻ゆはれめー四の屋あくすゆ味アリ  
入多橋政まくゆかよみの舟女アミとふーのひ事

あをと石竹を

うきかりあくふ波せむ夜なれの我や三度すあむとすくん

左思母

卷之十

ひきとすの乃まうんすまほへるあらぬふやくのそ  
東三條にすうり出でるの序々小

まうかよみあめ面うえを  
はあそびあれ窟りの面あ

中納之丞准仲名  
五郎左衛門也  
其子少卿也

事よりは定めたりしにあらず  
歌りに

左大内。御時もあらへし。まことに。女侍も。小  
まこと。アラヒ。あらへし。実方。御時も。まこと。紋  
も。約。多。年。つる。お。まく。ひ。小。侍。アラヒ。た

1

卷之三

乙女ふう袖、かまくらの内、まのえをすき等す。おひやゆる  
いかうふまくもあひて、け多く、ゆめのありひしきけけん  
りそひ。けくまくもくれを  
いあひぬけむすをくもくはきあひく全とくとくさん

物語の事江井若狭をあわすより上のうやてをかひりまくらへる

拾遺記下

あくまでもうかのよがりをもんじんぐりの城人があくまやい  
双さみのともにまにえかひひのまのまくわやくめん物ゑやくあくま  
めれおをいづきまくらんよの今くわやくあくも見まくらい

あうされ竹の子は  
色も人とのあい

嫁女  
大臣

あきよれけむる時  
天の下をうつすあすまやきじゆれ衣ひとものあれ  
物よりに  
月くどりあけくわみあせらがらぬふぢやうらをもりよ  
あそはかめおこすもん城ゆり舞ふよきくさくと  
うもつもまの糸うせあん延ゆま人のたすの数えん  
まきがねふけりくまくわくまちほまへをまくわく  
まくわくあそりはうれあくわいりくわくわくふはく

人声れぬ人行きあふるゆめういたりたのむすを承りん  
五

七

ひよひよにあらへぬかのまゝ人よあへねんよ  
かゆき敷たまゆ作小竹ノタマ付下さむひりちぢみ  
てほなうよのよふきえけふうれき  
人声をいたのやうといが、やあなりとやあたさんとくすり  
やんとおまへたまひく女のみくふ林のうちあひゆ  
まくさんともとものひうれき

柔女

秋暮れはあはれに極むるやうなあれは廉とまうんやうたあ  
歌す

卷之三

身人にはよれどもまづうかく衆人やまよひへゆるまづ  
まづりゆすみゆけりとく女にとふりもちうゑひとくよれ  
はくわんじゆくわんじゆくわんじゆくわんじゆくわんじゆ

こもふがくすくまうみとまうふすけうきほと  
ゆくひれつうりへく

まほうあたのたまはるのまほりあらめよほじうれ  
かくわくうかく女城せちかまくへいほくちうく  
こめつうへく

えうくの巻せうへぬまから國の虎ふ守のゆきをあけてん  
さみゆゑへうすく女のみ井ふ守へあひあすれす  
ゆもとよとく

防かずお常にまくらゆの井はあうむ人牙るれぬか  
ニキのるけあたゞくりやくらへくうづくあくくふ  
ゆうぢうほくはくすくふくまくとけりうれも  
くまふくのくんとくまくあく

まあるく別と附を守井のまくへうしゆく

歌くらば

うへうへのとうくらゆは推築の巻くへすくらゆくへく  
くらうまうへこたるくまくはたまほくまく  
くれを女のみくまくそくまくうれも  
あやまちほくらうかねうれすくまく死社すれ

歌くらば

けくはくはくへと消えう人のよせをあれすもあ  
すくがくもくひもくれよゆくはくはくはくはく  
深川を湯くん人のうへうへをふたまくふゆのあくくん  
契養姓附のあははなたまくめあくふかくの  
くれるゆくまく左右のわはありてふりはは  
ちく

すす推築巻の川途は藤波のかきくにまくはすのたかく

歌くらば

おれいのうへせきへまきくのまきくのれのまくへたかく

桔光下

埋あたまう虫ちもよかられを久米路の松ひですゆ  
安中いさとをいさや風のちに松な秋もふら地とそされ  
いそんすりけりくら女のかくくまくもくくふ  
くえなまうまの山は木のまくらかくまくねをほせんる  
りくの玉不れりきくすりけりかくねをほせんる  
がくあら玉

沖津波たうは陰の宿ねぬむとて馬を行ゆうき

かくじくからりけりあーたなせんとうなの女はめ

りくふつうくら

馬をのこらへやうて歩とくもくはまくをじよひが

あくめう人のりたつうくら

られやう城のあゆまくらへーおも事不城ぬりとくをれ

終くらす

山科の本幅のゆふらへあれとかもうそとくを思ひへ

今まろ

まゆの重井がくわくをくれとあひ思ひくはまとすとわりく  
物一すくをくもとちに済つてふうひの仕事とすと  
我せとそをもとく一頃あら松そりんゑとまれ見

人すとそくまくらへまくらへあまのあはれけりまくら

よそ

あら城多う被ふかくみる又あはくとくちまくまく  
にあめの屏風にあまめくとくあふはくあく

す

育てう身をあみとくせよとくまくたけのまくとくまく

えれ

れくわくのまふあくまくのをくわきよとくわくわくん  
うまく

まく

空あらじんぐくにまくられは只涙高もふれまくとく  
かくまくうらへあくわくわくわくれ

まく

猪の年をもむかし哉數をもあがめあるうへ

歌う

ゆゑやまの草木はすれいあやうやすき人のふう

よし

久方のあひ降り残た猪のふをれいもありれたまき

あら

とくと結まるときうきうきう女のまかわゆうり

あら

うかねく行こうすまのまかはうまく先手をうく

よし

あんまくまくまくまくまくまく

よし

西陣で雇ふたまうるまうる水淮すまふれのこめつま

よし

よもよも小西陣あらむりたうもあみに新しもゆすめうへ

よし

の船の時た全た后定トテアのスとの洋ふほう

よし

まゆのかくうや経ふ事のあは思ひ出ぬ人の名ふい

よし

のちうのゆゆにさる猪の松の木をあはもう一思つも

よし

女めひと不運をねてほのアケル

よし

トカのともあそぶあらぬを菊のあらを茶せ哉ふべきあがそ

よし

お君寧ねまきのゆうもすめ不まめりかよひておと

よし

なくまうとくも残ちこひうへタれちんの松を

よし

そぞ猪々る哉巨アセセセ

よし

沢川あまされどやあまの松の枕のうねてとぬうまうん

よし

白森の時接あみのミヤモトおなづかむくま

よし

ゆめのとふつきとまわらきタる

よし

せ中をなぬま物とゆううとまこととまこと

よし

つまきひをなま物と思ひつゝとたのみやいよぬ

よし

あこひみくもあひ残高の名えふとる美うさよせ

よし

つもすよ仕立る女のあみをせんのいはされと

一条桜政のもえうことひはりたりされと

石見かとゆうへつらむほらめにねきをも見えよし

一条桜政下らうに仕立る時風氣の女は不仕

立る女よ恐ひて物のいはれふかふかとひとと

ひひと仕立れも來りしるみじりへなとひつらじ

さくさきも

それなしぬけしむとぞ思ねどいにひにうを耳にとやん

昇りらす

お移する約めつまほくちあらをあらわじへり

君みねに詣かの神をうちめよつまみをほつうさん

白森内時中言葉屋ノア

のほきをうあきとゑんじ海の山をしあへ移ふをみる

よみくみようふまうとくあきりしはくめて仕立る女のと

くすりまきで仕立れと

あとづへいあうお神もほらまかぐ人のゐとへわらきりと

稻荷の祠うちか女のとよとち付て仕立る

懸のゆゑてもあゆへいありゆあぬのゆゑあるとおん

えぬのみこえーくまのうらきとみたる女がりとす

おまきとくせて仕立れと

出ひ出でとみあす秋も初る色の服をとるえぐり

女のとてん扇をほりたりこれひつみワタる

ゆじとていもむる今のかひもあさうおとひ風よつきとみあん

昇りらじ

贈一とゆきとみあす秋も初る色の服をとるえぐり

三三余お大臣の扇風に

おもおれあらのゆよかまた竿の右うやんを相あらん

すのとよまふ人まち仕立る人のよみ仕立る

仕立下

新めつすまきと人成経おとふ年はくさめでうらめあが

左右

もとをめふまうをとねて又の年おま櫻のまお  
さうまにあめもせ見ていまうふるひをのふや

つみ影とよみほりくゑ

橋のとあるとくらむなれんをゑお間をまつはくらる  
傳不名のと御る橋をとよめま戦らひんとすくん  
るの色の高ち昔おそれあくらかむれる物が高そむくる  
橋を匂ふ物うらかみあが木本詠めし物をふみ紫へ

より哉きく侍りとのちに

思まさひまつをわす 猛を聞めたよにすをぬへま  
中納を敷たまうりからねて後わえのす坂本小

侍多の里にんくまうとも見侍るふ

古べちるをや人のおとけむるふそ今ひ苦こかう

天原門かられ跡をスのく一五月五日に玄因

今あゆももうりくふつねくらる

立角きくかられ跡をあやめまくらる

あくたうやわねはるすのやうもくらふくらう

てかくもとはふくらる後の手がひ出すりはるも

スノ

葉とやあやめの和風のまうあらかくねはるをくへるん

おまかはるのゆりこまうもかられまくらにあゆのりと

ほうりくら

あふたよつれくの時をまへてあわの森へいりかそ

ねうちのむきんのりあははづのひく

桜を仰むりねくと思ひきん人見るあははそもくらめ  
えちのむのむきんちのくらむくらむてつまくらめ

五のひとのまくら

右左

時あらうともおのむきをかねふたりふみりく拂りましん

あのたゞあらうほきをひき秋風のよもよむす

ほきれを

おひさや秋のよ風の空ときに妹をきく庭に招待んとは

おまかうれしゆの季の秋の秋の秋の前秋の秋の秋の秋

とくとくの吹きひくしたるをかほり

秋風かあひくそま葉の落とす消す一人をほにたさん

あかまつをうねく年の年は秋月をかほり

あかまつをうねく年の年は秋月をかほり

朱雀宮の西四十九日の辺ゆかのたの波が船に寄り

まづりて舟を泊りとどく

あたうて立多事の花葉あらはしまさへまくと想へうるまく

さくの泡不うれの泡城たまくとまく

こまくありねぐれ聲を捨ほの泡おもむくと想へ一か

人あらうともおのむきをかねふたりふみりく拂りましん

おあふをうれをかきくひよみほり

藤衣あひ見えひとぬひせんねをかきくとめく

まくとくとくまくとくはくとよとよとまくぬ不むすひ

はまくとほまく

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

人あらうともおのむきをかねふたりふみりく拂りましん

おあふをうれをかきくひよみほり

藤衣あひ見えひとぬひせんねをかきくとめく

まくとくとくまくとくはくとよとよとまくぬ不むすひ

歌

四十六

歌  
うす

卷之三

ほの衣の袖ひきたれや 同のあはるを守る人  
掌突庵人改正五位下 左をさむね天也二事  
義孝院五位上布をすね天也二事 東吉移毫義廿五

あうてゆり

あまくらとゆめもあまのうなれをうよふよぬ燈をたれぬらん  
もうくゑすけくわかくあくなくくら玉をなげ

卷之三

事なきのみ景へる事あつて死んであれども數あれどりとと思へ  
おやふをうち此をはくることわざとひ仕えまうれい  
をまくらむあはづけもまめの危うきのれぬ間へたり  
歌へりす

江  
行

うつまく思ひてゆきをよみがへりあわせをされま  
順りよかくわざくわざひそひふはうりまく  
あらやあらぬ事はあらぬ事はあらぬ人の神はあらぬ  
あたぢのよしよしよしよし

卷之三

はるかに身をひじりて歌つて聞ゆましめむれどもすれ  
うきりたゞくもみこのあへなすくさまみや  
郭

卷之三

いせりきりくすのゆをそひふほうじとく

あらうふわうふかみれをなまくいもんみのまをな記 宣文  
おぬを差浦りたくあくすけうちうのますふつ

ゆまとまうて物ひひけちつわくす

多數またまほのまうあをなまくのみやいもくをくたむあん

やをくあくすほふあはたくあにまうんとぞひつ

アキラレモ

いせんたのめつとくはく取とくはくすふあきれ

すあうけまう人のひくはまうをかれいまま

まくすかねまむまくとあまくまくがくくまのりあ

もすあふきくれ

まくすかねまくとあまくまくがくくまのりあ

中易

あまくふきくれ

まくすかねまくとあまくまくがくくまのりあ

歌

まくすかねまくとあまくまくがくくまのりあ

きくのうねあかくたうほよみく

まくすかねまくとあまくまくがくくまのりあ

きくのうねあかくたうほよみく

まくすかねまくとあまくまくがくくまのりあ

きくのうねあかくたうほよみく

まくすかねまくとあまくまくがくくまのりあ

きくのうねあかくたうほよみく

まくすかねまくとあまくまくがくくまのりあ

きくのうねあかくたうほよみく

まわりのひとひきりにあまのよまところ  
いもんおけりかうあうけぬまにゆく  
まは島かまくらまくあすくはりあん  
せりあらわきくまつねあらわりくれ  
はなれのむきよあひくや  
まいわりかうふき

まふ皆あらわすやうに自殺のまゝあるのみある社もこれ  
へまうちよろしくあらわすやうにさうあるにまづあん

あめをあにうまうてはる  
朱雀院せきやくじゆくもあくくすくを空

おもてのまへにあらわす  
おもてのまへにあらわす

高野山不系煙のりをなすいもあくまえし我よ  
ああん

馬首東方須早行

あれやまきのひを  
あらわすとへゆき

城中城中あたまのんを近ちあそびにゆきぬるのちう波  
おもてあわせのうきよこへとまく

あれいかたちをあれどもあらわすがに違ひと見えん

はかにちくさんじゆくすむかへるの

はなる

浮雲の省うひをすむ省ああんせうもあくまへれすすり身の

歌へらひ

牛の車はたまのうきひの車ひの車をぬうひです  
は師ふをうんじゆうにかくまかうされいたまみ

ほん  
よし  
ほん  
ほん

草木のぬるをもくわきこゑをのうも消ある物こちりく

根すねうめあひのとくけうくわのあまにすり  
みとくわはうくわ

重慶の毛のぬのこもひとほ壁をすく／＼あくわ

ほん  
ほん  
ほん

萬葉歌歌くこれもよそかうけ竹竹ふさる色ふそなる

成作重あくおお／＼おもいの左大序は成うけくふ

つれはの／＼うる成作近四位上大すお重五位四位

下左をすおと保二年二百三日出處

呂似あらんちまきう常事をいりそりつゝても生あらん

が酒を藤系経理やくひちまきうのけうを志努うん

お家一作よまきうひつひはうくわ

さはや志努の浦ゆいうをうそくほ西めす／＼おめうん

女房内ハ篠持物れかひ／＼かめうもとほううて

せう

ひはうをみくし川の荒なれい法のほあたありあくうり

毛唐の時秋きみのまのまのぬけ架せきせばかんとく竹

くも絆まくをほすすくられひやうくすみまくけ／＼山

浦わくあまをほすすくられひやうくすみまくけ／＼山

せう

けまくふむのむりまくさうれも

行  
年  
十  
九  
歲  
成  
才  
學  
文  
書

卷之三

えむよけとおの夢におうけあわしめ

まことにうよんがく

ひちりたみを今まわすたゆもあらん

性也。よ人の氣もふさうもくはうる

まくらをかきこむのよしめのまくら

其處也。故曰：「竹子多。」

少卿之子也。少卿之子也。

本山の水を引いて、水を引く事無く、水を引く事無く、

卷之三

卷之三

老の空石山はあらびくからうづくまひをも

もすり二の次第をあくまでもおもてはせ

大清國寶

故人與我共之。故人曰：「子之不識也，固矣！」

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

萬に於て其の事は少く、かへるゝを嘗め、其の後おもに其のうれ

わき處を尋ねて富山の邑守へおひこ爲めに候ひまことに

人言其事皆出風塵外不可謂之無功蓋亦以爲人言其事皆出風塵外不可謂之無功蓋亦以爲

アラタナホトモサシテハシマツル

あゆみすまほやもよよせむのうてはあらとめよよよ  
うつぐのうへすわゆひきほくは故にすのまきいと  
きあくやかくまくほりあきくわめくわくわくわ  
あくにあくにまくわめくわくわくわくわくわ  
りあくうそくわきくわくわくわくわくわくわ  
んがくうそくわきくわくわくわくわくわくわ

拾遺集卷之三

貞享二年二月元版出版  
明治廿二年七月十日印刷  
同年同月十五日出版

故人

奉勅撰者  
藤原公任  
東京府平民  
江嶋伊兵衛

9

卽刷者  
江嶼鴻山

江嶋鴉山

